

# 修 道 の 偉 人



修道まちづくり会 にぎわい委員会

## はじめに

わが郷土、修道は江戸時代から昭和初期にかけて、古市参宮街道を中心に栄えたまちです。

江戸時代末期には1年間に500万人の参拝客が伊勢神宮へお参りしました。この人数は日本の人口の6人に1人であったといわれています。参拝客が古市参宮街道をおかげ参りとして歩く姿が目に見えます。

第2次世界大戦で殆どの建物が焼失してしまいましたが、「修道まちづくり会」は昔のにぎわいを取り戻そうという大きな目標を掲げ、一つの手段として**弥次さん喜多さんの道「古市参宮街道（ガイドマップ）第2版**を平成27年2月に発行しました。

今回は郷土の偉人として、**乞食月僊**といわれながらも公共事業や慈善事業のためには惜しげもなく金を費やし、千姫の菩提寺である寂照寺の再建を成し遂げた**月僊**、金一千両を用意して牛谷坂を大改修した**千束屋り**と、現在の伊勢市の基礎や神宮の尊厳と神聖の保持を構築した備前屋の最後の主人**太田小三郎**を「**修道の偉人**」として取り上げました。

修道地区の皆様には、過去にこんな素晴らしい人物がいたということを知って頂くために発行することと致しました。

平成27年12月23日

修道まちづくり会 会長 西山裕司

## 公共事業や慈善事業 はたまた寂照寺の再建と月僊さんは大忙し!!



月僊上人像

月僊は、はじめの名を玄瑞、字を玉成といいました。月僊はその号であります。

月僊は、寛保元年（1741）元旦、名古屋桜町の味噌醤油醸造業丹家八左衛門の二男として生まれました。そして早くも、7歳にして円輪寺に入り、16歳の時、関通上人により得度し、玄瑞と名を改めました。

絵の好きな彼は、暇さえあると絵を描いて、しばしば師匠に鬻ぎをかっていました。やがて師の坊も、彼の画才が並々でないことを認め、江戸三縁山増上寺に彼を修学に出しました。当時、増上寺の法主、妙誉定月大僧正は、三重県度会郡二見町今一色出身であり、同郷の誼もあり、彼を非常に可愛がりました。そして定月の一字を与えて月僊と号せしめて、画才を愛するとともに、画を桜井雪館（後の12世雪舟）に学ばせました。

かくして**月僊**は、仏道修行の傍ら画道を通じて、多くの名公巨人と交わる機会を得て、ますます実をあげ、名を高からしめました。それに満足せず、さらに画道探求の為、師の許しを受け、江戸を捨て京に上ったのであります。それが彼、25歳の時でありました。

京に入った**月僊**は、知恩院57世壇誉貞現大僧正の殊遇を受け、洛東小松谷正林寺に3年間、円山応挙について写真主義を勉強し、さらに江戸の雪舟や、元、明の書を慕い、今、池大雅とともに、日本南画の大成者と目されている与謝蕪村の画風をも加えて、別に一機軸を出すに至ったのであります。特に、山水、人物に長じ、その名声は漸く四方に喧伝されて、知恩院の**月僊**の名を高からしめました。思わぬところに伏兵があり、以後の彼の運命を大きく変えてしまいました。

伊勢の中之地藏町（中之町）にある寂照寺は、天樹院殿（徳川秀忠の女千姫）の菩提寺であり、延宝年間（1673〜80）知恩院第37世寂照知鑑大和尚が、天樹院の位牌並びに遺物を奉じて、その追善供養の為に開基した寺で、知恩院にとっては最重要な末寺でありました。その重要な末寺である寂照寺が、先住の死後、永く無住のまま放置されて、今や廃寺寸前という荒廃した状態になっていました。それにより、後任住職には、当然寺観回復という重大使命が課せられることとなりますが、これは容易な技でなく、誰もが良くなし得ることではありませんでした。そこに後任住職晋山の遅れた原因がありました。時の知恩院第57世貫主壇誉は、この荒廃した末寺の寺観を立派に回復し得る者は、**月僊**しかいないと考えました。彼なれば、高潔な人格に加えて、名声高い余技があり、必ずや期待に応えてくれるに違いないと考えました。そこで、説得して、ついに、寂照寺第8世の住職と

して彼を晋山せしめることになりました。時に**月僊**34歳の春でした。

**月僊**が、安政3年（1774）、そういう重大使命を帯びて入山しますと、寺観回復達成の目的を常に念頭におきつつ、ひたすら、余技を以て資金蓄積を心掛けました。**月僊**の名を慕って揮毫を乞う者には、上下高卑の別なく歓迎し、潤筆料の多寡によって礼をつくしたといわれています。また画料を前納する者には、直ちに染筆するが、後払いの者には、いかにそれが貴人富人であつても、順番の来るまでは筆を染めなかつたといわれています。そういうやり方が、いかにも金銭に貪欲で、僧侶にあるまじき賤しい行為であるといので、世人は彼を**乞食月僊**などと卑しみました。だが、いかに罵られようと、彼には大望悲願があり、その為に、彼は身体の続く限り精力的に多作し、画料を貪り取りました。たとえ、観劇中といえども、画筆をはなさなかつたほどの熱心さであつたといわれています。

また**月僊**は、自己の画風に新しい画風を注入する努力も忘れませんでした。天明8年（1788）8月3日、洋画の始祖と仰がれていた司馬江漢が来訪した時は、激しく洋画探求の念に炎えましたが、惜しくも、道を究める機会を得ずに終わりました。しかし、その後、描かれた有名な仏涅槃図の一部に、その時感得した洋画の片鱗をのぞかせているのであります。

ある時、谷文晁が来訪し、試みに「あなたの潤筆料はどれほどになりますか」と問うたところ、上人は「1年に九十両ほどにもなりませうかな」と答えたので、文晁大いに驚き「江戸にいてかなりの売れっ子である自分でさえ、1年に百両にも満たないのに、田舎にいて、九十両とは、恐れ入った」と舌を巻いたということがあります。

この一事を以てしても、彼が当時、いかに多作をし、画料の取得に懸命であったかがわかります。その画料も晩年にはおそらく、年間二百両から三百両にも達したことであろうと思われます。このようにして、画料をせっせと蓄積しながらも、自分は全く粗衣粗食に甘んじ、少しも飾るところがありませんでした。布施や謝礼の紙は、皺しわを伸ばして用紙に使用するという徹底した質素節約振りで、**乞食月僊**のイメージにぴったりの生活振りでありました。

しかし、**公共事業（間の山改修）**や**慈善事業**の為には、かなり大胆に、惜しげもなく金を費やしているのです。ところが**月僊**の面目躍如たるところであり、特に、長年にわたった天明の飢饉には多くの人に施米したりした金額が多額に上り、ほとんど蓄財の大半を費消したほどであったといわれています。いよいよ念願の伽藍再建に着手したのが寛政9年（1797）であり、大殿、庫裡くら、倉庫などの完成をみました。山門に掲げる「栄松山」の山号額は、天台座主真仁法親王の筆であります。ついで経堂の新築は寛政12年（1800）から享和3年（1803）秋にかけて行われ、中に世義寺から購入した一切経2000冊が収蔵されました。現在は平成24年に再建された経堂に2400冊収蔵されています。

初期の目的を達成した**月僊**は、さらにここにおいて、事後の寺堂維持にも心を配り、再び後代の荒廃を防ぐため、寛政12年（1800）金百両、享和3年（1803）金四百両の合計五百両を官に託し、その利子（年四十両）を以て、寺堂の維持に当てたのであります。**月僊**はこの修復中、同じく知恩院の末寺である尾上町の清雲院（家康の側室お夏の方の菩提寺、現在は神社港にある）に仮寓することになりま

したが、ここであの有名な涅槃図が描かれたのであります。

仏涅槃図は正副二幅描かれ、正を寂照寺に副を清雲院に残しましたが、明治14年5月12日の寂照寺炎上により焼失しました。現在寂照寺にある涅槃図は**月僊**が清雲院に残してきた下絵です。この火災は寂照寺一字にとどまり、他に類を及ぼさなかったが、そのため折角、**月僊**



寂照寺の山門

苦心の伽藍、庫裏を焼き、経堂内部の回転式経架に納まっていた一切経2000余点の内約200点を焼失しました。しかし、伊勢市指定文化財になっている**月僊筆富士**、**月僊**の印章、絵皿などの宝物は無事でした。現在の寺堂は、明治23年第12世源州の再建です。

更に**月僊**は、文化2年（1805）と5年に一千両と五百両、計一千五百両を奉行所に寄託し、その利子を以て貧民救済の費用に充てることとしました。これを**月僊金**といいます。この**月僊金**は、明治元年まで引き続き実施され、その後、度会県から宇治山田市、更に伊勢市にと引き継がれ、市財政の一翼に**月僊金**の名をとどめていました。

十両で首が飛び、七兩二分で**姦夫沙汰**も事済になった時代の一千五百両であります。いかに**月僊**が世俗に染まらぬ高潔な人格を持った高徳な人であったかがわかります。

**月僊**は飄々として、生涯弊衣をまとって飾らず、乞食坊主よ、**乞食月僊**よと罵られても平然と、ただ一途の大道に生きた高僧であったとともに、大画家、大社会事業家でもあったから、彼にまつわる逸話も非常に多くありました。

いよいよ最後の日が近づいた時、弟子たちを側に呼び寄せ、法華経、般若経等大乘経を互いに読経させ、世事には一切触れず、眠るように涅槃に入ったといえます。時に文化6年（1809）正月12日、**月僊基金**の追加五百両を奉行所に納入してから、僅か4ヶ月のあとでありました。世寿69歳。墓は本堂東南、歴代住職墓域にあります。

境内にある**月僊上人之碑**は弟子定僊の建立であります。昭和46年1月序幕された**月僊銅像**も境内にあります。

画の弟子も多く、近いところでは古市の久土目月窓、久世戸本誓寺

の月峻、河崎専修院の月珪らがあります。

経堂の南にある観音堂は、俗称お岩観音と称せられる木像が安置されています。3尺9寸5分の立像で、恵心僧都の作と伝えられ、現在は秘仏になっていて、拝観できません。実物大模造金仏は、寂照寺本堂にあり、**月僊木像**とともに安置されています。

〈参考文献〉「伊勢の古市夜話」（昭和51年7月10日）野村可通著



月僊記念館（文殊堂）



歌舞伎の貸衣裳 (皇學館大学神道博物館蔵)

# 千束屋りと

## 女丈夫のりどさん

### 全財産を投げ出して牛谷坂の大改修!!

りとは、安濃津八町(現在の津市八町)の生まれで、魚仲買人八兵衛の娘として生まれましたが、幼くして父母に死別し、6歳未満で親類に引き取られて育ったのであります。その少女時代は知るすべもありませんが、相当な苦勞の末、成人したことは容易に想像できます。

さて運命の日は、それから約10年余りの内にやってきました。その頃千切屋の二男久五郎は、各地を流浪していました。それがどういう形で、何が原因で流浪していたのか一切分からないのであります。が、とにかく津で、問題の人りと知り合い、相共に松阪に来て、茶汲み女2人ぐらいを抱える宿場茶屋を出しています。これを当時「三寸山」といいました。

しかし、家業は振るわず、その年の瀬を越しかねるほどの困窮こんきゆうに陥りました。するとその翌朝、即ち

元旦、ふと庭前を見ますと、枯れ木の干し物竿かけの松の古木に、南枝が青々と蘇生しているようにみえました。そこでりとは、松は将来頼るべき人の姓氏であり、南枝は古市の本宅であろうと感得して、即日、古市へ帰り、顔付の娼婦を買取って、あまたの利益を収めたと諸書にみえています。その靈感はともかくとして、りとは天性利発で、夫操縦法にも長けていたと思われれますので、こんな理屈をつけて、夫の決断を促したとも受取れます。

古市へ戻った久五郎夫妻は、古市下の町へ居を構え妓楼を開業しました。屋号を千束屋とし大いに栄えました。特に、他にさきがけて増築した裏座敷鼓の間は、襖、衝立、茶器、膳部、浴衣にいたるまで、すべて鼓の絵を配し、柏屋の松の間とともに、道者間の評判となりました。これについて十返舎一九の『東海道中膝栗毛』にも、千束屋の鼓の間、柏屋の松の間、わしや案内するさかい、いかんせんか。北「おいらは太鼓の間が見たいがどうだ。」上「またたいこといはんす。つづみの間じゃわいな」女「つづみの間には、これもおえどのお客さんがたが、子どもしゅうよせておどらせてじゃ。アレきかんせ、と此内つづみの間にておどりはじまると見えて、さみせんのおときこえる。誰あらふ、勢州千束屋のお辨女郎といふ、美しい、かわゆらしい、女の辨才天神様は、かたじけなくも、尊くも、京都千本通り中立売ひよいと上がる辺栗や与太九郎さまの相方じゃ、ちとねきよらんせんかいの」とあり、文化（1804～1818）年代における千束屋の盛況を十分偲ぶことができます。

この鼓の間は、りとは考えだした女能舞を披露するために新築されたもので、女郎に能衣裳を着せ、特設の舞台で優雅な舞を披露し、もつ



牛谷坂の入口



て遊客のレベルアップを図ろうとしたもので、従って、建築にも美術的な粋をこらしたため、紳士、豪商に大いに受け、りとの奇策はまんまと図に当たり、たちまち、内外の大評判を呼びました。

ところが、この評判がついに幕府にまで聞こえ、寛政元年（1789）5月5日、山田奉行から、左の『達令』が出て禁止されてしまいました。  
**古市町茶汲女能狂言等いたし候趣相聞へ候。向後一切相止し申し候事。**

この達令には、さすがのりとも一本参ったと思いの外、たちまち一策を案じて、今度はぐっとくだけて、今、古市で大評判をとっている川崎音頭を座敷へ持ち出して、どんじゃかどんじゃかと、座敷で、大舞踏会を開催したのだから驚きました。たちまち、評判は全国にこたまして、またまた大成功を遂げました。これは享保の昔、名古屋西小路で、座敷に川崎音頭を持出して成功した例にヒントを得たものと思われませんが、女能舞といい、川崎音頭といい、他家にさきがけて実行に移した決断と度胸は、凡人の到底果たし得ないところで、稀にみる女丈夫というほかはありません。

更に、外宮長官従二位松木言彦卿の手記の一節の教えに従って、ある日突然賤業廃止を宣言し、即日、抱え妓楼には、年期証文をまいて開放し、あの有名な**鼓の間**も千切屋に売却し、家政を整理し、金一両を用意して、夫市右衛門の名を以て**牛谷坂直路開作の大工事**に着手したのであります。もちろん、夫市右衛門とよく談合した上での決断であったと思いますが、瞬く間に、古市2、3の資産家にまでのし上ってきた家業を自らの手でかなぐり捨て、ほとんど全財産を投じて、**牛谷坂開修工事**に、心血を注いだその熱意と度量に対し、ただただ頭の下がる思いがします。



牛谷坂

その功により、苗字帯刀を許され、山田姓を名乗って今日なお連綿と続いているのでありますが、そのりとにして心のどこかに風の吹き通る寂しさが絶えず付きまといまわりました。それは、子宝に恵まれないうことでもあります。ために、葛城屋初代の四女へ、津のりとの甥を妻あわせて、千束屋2代目としましたが、不幸にも夫妻とも若くして没し、幼い孫との寂しい境涯が続きました。特に、文化5年(1808)夫市右衛門が70歳で世を去ってからは、いよいよ境涯でありません。かねてから考えていたのだろうと思えますが、楠部にあった10町歩ばかりの田地と舟橋屋の衣裳とを交換して、3代目である孫に、貸衣裳店を経営させました。舟橋屋は、夫市右衛門の弟が経営する貸衣裳店であります。

とにかく、りとのこの発案は、その後165年間にわたって子孫が栄え、特に、明治後期にいたる80年間は、最も繁盛をみた時代で、岡本町の片岡や松阪の同業者を遥かに凌ぐ繁盛振りであったといえますから、またまた大いに図に当たった訳であります。

りとは88歳の米寿の祝いに、手製の米寿袋とへらと物差しと紅白のせちを親類縁者に配ってその秋、1日も褥につかず、眠るように往生したといえます。時に文政11年(1828)10月29日でありました。お墓は久世戸町墓地にあり、初代山田市右衛門妻里と刻まれています。

※10町歩…10ヘクタール

〈参考文献〉「伊勢の古市あれこれ」(昭和51年3月10日) 野村可通 著

「宇治山田市史 下巻」



りとの直筆



千束屋で遊ぶ弥次・喜多

# 太田小三郎

## 伊勢の近代化と神宮の尊厳・神聖の保持は 小三郎さんの功績が大!!



太田小三郎氏の肖像画

太田小三郎は古市三大妓楼の一つである備前屋の最後の主人で、崇敬家としても知られた人です。

小三郎が生涯を通じて成し遂げてきた神都における文化事業のいずれもが現代文化のさきがけであり、その足跡は誠に大きく、伊勢市民にとって忘れることができない大恩人です。小三郎は修道地区にとっても忘れることのできない人物であると考察します。

小三郎は、弘化3年（1846）1月28日、豊前国彦山（現在の福岡県東部と大分県北部）に鷹羽寿一郎の三男として生まれました。初めの名は匡一、後には長山と号し、家は累代豊前英彦山の執当職で、長男

浄典は幕末勤皇の大義を唱えて遂に之に殉じました。

**小三郎**は※沈毅果斷濟世の志を有し、明治5年（1872）初めて神宮に参拝した時、縁あつて備前屋こと太田家の養嗣子（**小三郎**27歳）となりました。当時の備前屋は、外見の派手さとは裏腹に、累代の負債が嵩んでいました。**小三郎**は直ちにこの深刻な状況打開のため、整理に着手し、わずか10余年で、この負債を解消し、傾きかけた家業を立派に立て直しました。経済の才はのち山田銀行を創設しただけあり、余程非凡な才能を有していたものとみえます。家運の挽回や後顧の憂いが全くなくなると、かねての理想（**神宮の尊厳と神聖を保持すること**）に乗り出すこととなります。それは**小三郎**が42、3歳の働き盛り、社会的にも貫禄十分であり、人間的にも円熟味を加えてきている頃でありました。

当時の神宮は、宮域の中に民家が入り込んでいて、何処までが宮域で、何処からが民有地だか判然としないまま、神宮の尊厳と神聖が保たれていませんでした。そこで彼は「**神宮の尊厳を維持し、我が国の象徴である神宮とその町を国民崇拜の境域にすべき**」と呼びかけて同志を募り、明治19年（1886）に財団法人「**神苑会**」が結成されました。

**小三郎**が神宮の整備に尽した業績は、想像以上なものがあり、明治天皇下賜金、一般崇敬者の寄付金等合わせて711万円余りの浄財を元にして、神宮周辺の民家183戸を撤去したり、土地2万余歩を買収して両宮神苑の拡充を図り、内宮々域補正と風致のための内宮付近の山林買収50万余歩、更には倉田山に3万余歩の土地を買収して**神宮徴古館・農業館**を建設し、**神宮文庫**をつくるなど、活発な事

業を行いました。**小三郎**は単なる敬神家というのではなく、偉大な事業の実践家でもありました。しかもその事業は広い視野に立つて行われ、近代的な伊勢市開発の名誉ある開拓者でありました。

例えば、明治23年（1890）には、他に先駆けて参宮鉄道（株）を創立して、初めて亀山〜鳥羽間に鉄道を敷設し、現在のJR参宮線の基礎をつくりました。更に明治29年（1896）には、秋田喜助などと共に宮川電気（株）をつくり市内の電灯・電車事業を開発しました。後に社名を伊勢電気（株）と改め、明治35年（1902）山田〜二見間に電車を走らせ、これがやがて三重合同電気（株）（中部電力）に発展するものであります。その他事業を振興するためには、金融の必要性を痛感して市内に山田銀行を創立しています。

**小三郎**の事業は多岐にわたっており、神宮につながる製紙業についても、殖産組を起こして神都製紙（現・大豊和紙工業（株））の創業を助けて、自ら精舎の印刷業を経営するなど優れた事業家でありました。

大正5年（1916）9月5日、突然病を発して没する時が来ましたが、通常の人ではなし得ない驚異の人生は、惜しくも72歳で終了したのであります。お墓は久世戸町墓地の奥にあります。記念碑は県道鳥羽松坂線（御幸道路）を内宮に向かって大鳥居を20m過ぎた左側に『**太田小三郎君紀功碑**』（昭和9年11月5日）と刻まれた大きな石碑が建立されています。「**神苑会**」は、数々の大事業の成功を永久に記念するために、明治44年（1911）3月、自らの手で倭姫前信号の近くへ**大記念碑**を建設しました。「**崇敬致誠**」と書かれた**大記念碑**の裏側に**太田小三郎**の名を見ることができます。



太田小三郎君紀功碑

※沈毅果斷…沈着で思い切つてするさま

濟世…世の弊害を取り除き人民を救い助けること

※1歩…1.822m

※711万円は現在の1,400億円と1,500億円相当

〈参考文献〉「伊勢古市考」(昭和46年7月25日) 野村可通著



神苑会の大記念碑

月僊 千束屋りと



太田小三郎

タイトル名：修道の偉人

発行日：平成27年12月23日

発行者：修道まちづくり会 にぎわい委員会

住所：〒516-0015

三重県伊勢市久世戸町5 修道小学校内

TEL：0596-67-6000

FAX：0596-67-7669

mail：shudo@amigo.ne.jp

HP：www.shudo.biz

月僊

千束屋りと

修道  
の  
偉人

太田小三郎